

2～3 世紀の中国の歴史が書かれた書で日本についての記述がある書籍には下記のような物がある。

- 漢書 (後漢・班固): 前漢の歴史を記した、初の王朝通史。(1 世紀)
- 三国志 (晋・陳寿): 三国時代 (魏・呉・蜀) を記述した歴史書。(280 年以降)
- 後漢書 (南朝宋・范曄): 後漢の時代を扱った歴史書。(5 世紀)

これ以外にも、「魏書」(王沈) 265 年を先行史書とした「魏史」, 「魏略」もある。

これらの歴史書は史実だけというのは無く, 日本書紀のように、ある目的に即した内容になっていると考えるのが妥当では無かろうか。

例えば「漢書」は孔子の儒教の考えが強く組み混まれて一種の儒教本にもなっているらしい。

そういう目で見ると「後漢書」は 5 世紀になって 1-2 世紀の頃の「漢」 について書かれているのはどこまでが真実なのかをかなり疑われる書の一つである。

その一つに金印の「漢委奴国王」がある。

当時「倭」というのはもともと儒教の君子国の意味であり、日本ということでは無かった。

それに、「倭」というのはこの時代には、まだ朝鮮半島北部にあったと考えられており、この時代に生まれたばかりの日本が「漢」との通商があったとは考えられない。

ということからだけでもこの「金印」の話というのは事実では無く、范曄が作り上げた話ということになる。

更に、「金印」実物については実際には江戸末期に作られたと思われた偽造問題があり、今までも何度もとりあげられている。

その証明は金印の成分分析をやればいいはず。

そのほか、范曄はこの「後漢書」という自作の歴史書で“邪馬台国”と“ヤマト”を何とか結びつけようとして、原文では「邪馬壹国」とあるのを、「それは間違いで、ヤマトに近い“邪馬臺国”だ」と変えて、話の展開をしてしまったようである。

後世では、それを真実と勘違いして、“邪馬臺国”は“ヤマト”だという学者たちが多くなってしまった。

現在でもかなりの学者たちは、ヤマトに“邪馬台国”があったと言っている。

「後漢書」については実際の時代の何百年もあとの 5 世紀になって書かれているという年代差も考慮するとかなり疑わしいことがかなり含まれ、歴史書というよりは“歴史ばなし”と言ってもいいのかも知れないのでは無かろうか。

このように何が真実なのかを見極めながら「邪馬台国」は追われていかなければならないが、上の二つの事実からだけでも、今までの「邪馬台国」への見方が大きく変わる。

「魏志倭人伝」(正確には「魏志東夷伝倭人の条」)

これは「三国志」のなかの「魏志東夷伝」内の倭人の条にあるもので、全体から見ればほ

んの一部である。

ただ、3世紀に書かれた「三国志」は魏、呉、蜀の戦いをベースにその戦術についても書かれた軍事書でもあるので、高い評価を受けているが、それに加えて孔子の儒教を強く押ししており、宣伝にも多めに利用したようである。

歴史家は元々自分の目ですべてを見ている訳では無く、それまでに得た知識やそれらを組み合わせてその現象やつながりを想像して書いたり、人の書いた歴史を書き写した場合もある。

例えば、「日本書紀」を見ればよくわかる。だれもこれが史実に基づいて書かれた物とは思わないだろう。

そういった中で三国志中の魏志倭人伝は魏の張政が卑弥呼の要請で日本に遠征し、帰国後に報告したレポート(これはどこにあるのか不明)をベースにして書いた物と思われる。

従って、そのレポートに書き加えたり、編集したり、変更を加えたりされていることも考えておかねばならない。

幸い「倭人の条」については、「魏志」以外にも「魏書」(王沈) 265年の中にも「倭人の条」があり、両書の比較が出来る。

両者はかなり一致しているようで、陳寿はそれほど大きな変更を加えては無いようである。

しかしながら、この「邪馬壹国」というのがこの地方で大きな中心になるような国ならば、誰も見落としたりせず、「魏書」も含めて同時代の他の歴史書に必ず書かれたはずである。それが陳寿の「倭人の条」内の1カ所だけしかないというなら、陳寿が新たに考えて作り上げたとしか考えられない。

陳寿は三国志を書くに当たり、中国古代史書の伝統の「先史を継ぐ」という概念を明確にするため、班固の書いた「漢書」の中の文句「倭人」(漢書にしか書かれていない)をそのまま引き継ぐと書いており、それを倭人の条のどこかにはっきりとその存在を見せたかったのでは無いかと思う。

他の国名は韓、高句麗、扶余などの表現になっており、日本も「倭」でいいのだろうが、君子の国という特別の意味を持たせてわざわざ漢書で言う「倭人」としたのだろう。

「倭(君子国)」は漢書の時代に、朝鮮半島北部(楽浪海)から始まったようで、その後時代とともにだんだん南下し、三国志時代にはもう「帯方の東南大海中にあり」となって、「倭」は日本列島の意味としての味が強まっており、「漢書」でいう「倭」の意味が薄れてしまっていたようだ。

そのため、「倭人」を追う陳寿としては、「儒教」の理想郷として「倭」に置き換わる新国名が必要だったのかも知れない。

そして、それを新しい儒教理想の国「邪馬壹国」という名前とし、さりげなく他の国の中に挿入したのであろう。

そうすればその国は実在しないでも、儒教理想の国の名前はしっかり存在するのだ。

これで陳寿は“漢書を継ぐ”が実現し、目的を果たしたことになる。

これが「真の「邪馬台国」」ということになろう。

「邪馬壹国」までは突き止めたが、そのネーミングについては気がつかなかった。

その時代に馬が日本に渡ってきているかどうかはまだ明確になっていないが、馬がいたことは馬の墓などが見つかったことなどからはっきりしている。

箸墓では高貴な馬具の装飾品が見つかった等、3世紀中頃にはもう日本に馬はいたのであろう。(倭人伝には馬、牛はいないとあるが)

陳寿は、馬は大変高貴な、人間の生活にとって大変貴重な動物“神馬”として、理想の国の生き物として扱ったのでは無かろうか？

それで陳寿は「倭人が一番早く理想の国で馬と一緒に快適な生活を始めている」として「馬壹」と新しさを加えたネーミングしたのでは無かろうか？

なお、邪馬の「邪」は当時の中国国境から北方にある国には皆つけている呼び名であるから、意味はなし。(蔑称でも無い)

多分馬はその時代のどこかで、朝鮮半島から渡来人が一緒に持込んで来たのであろうが、どこで入国し、どうやって育てていったのかは不明。(今後の勉強課題)

隣の国「投馬国」にも馬を使っていると言うことは、馬に関係する実体があったのは間違いないのでは無かろうか。

あとがき

「邪馬台国」については、「まぼろしの邪馬台国」以来、長年いろんな関係した本を読んではいたがはっきりしなかったところが多々あり、すっきりしなかった。それが、中島信文さんが書かれた下記の古代史シリーズ4巻を読んで雑知識が取り除かれたようにすっきりと「魏志倭人伝」というものが見えてきた。

そこで見えたのが“真の「邪馬壹国」”だったのだ。

ただし、中島さんは邪馬台国の実在を信じ(倭人伝を正直に信じ)追い求めておられる。

「古代中国漢字が解く日本古代史の虚偽と真実」

「陳寿「三国志」が語る知られざる驚異の古代日本」

「三国志」が明かす壮大で国際委的な古代日」

「日本国誕生の隠された秘密と真実」

まだ誰も発表していない真の「邪馬壹国」に気づいてもらえればありがたい。

名前の「邪馬壹国」については、「「邪馬台国」は無かった」という本で古田武彦さんが学術的な追求でも証明されてもいる。(ただしその実在については中島さんと同じく存在を前提に、更に追跡されたようだ)

終わり

## 参考書

まぼろしの邪馬台国	宮崎康平
女王卑弥呼の都する所	上野 武
倭人伝を読み直す	森 浩一
神武東征から邪馬台国	長浜 浩明
邪馬台国をとらえなおす	大塚 初重
魏志倭人伝の謎を解く	渡辺義浩
「神話」から読み直す古代天皇史	若井 敏明
邪馬台国の全解決	孫 栄健
秘められた邪馬台国	八尋 秀喜
古代史の謎は海路で解ける	長野 正孝
邪馬台国は熊本にあった	伊藤 雅文
古代史「10大遺跡」の謎	関 裕二
「魏志倭人伝を解く」序章	福永 晋三
卑弥呼の真実に迫る	伴 とし子
清張通史「邪馬台国」	松本 清張
古事記の邪馬台国	竹内 むつひろ
よもやま邪馬台国	豊田 滋道
邪馬台国再考	小林 敏男
邪馬台国論争	佐伯 有清
日本の古代1（倭人の登場）	森 浩一
金印偽造事件	三浦 佑之